

今昔物語

市制 70 周年を迎えた行橋市。山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきました。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.020 しょうはちまんぐう 正八幡宮

行橋駅の南、じんでんまち神田町に所在する正八幡宮は、願いをみちびく「勝運の神」を祀る行橋市民には馴染みの深い神社の 1 つです。春はなごしまつり神幸祭、夏はにいなめさい夏越祭、秋はにいなめさい新嘗祭、そして冬は除夜祭、歳旦祭、節分祭など、境内で執り行われる祭礼により、移ろう季節や古式ゆかしい日本の文化を感じることができます。

諸説ありますが、平安時代前期の貞観元年(859)の創建とされます。宇佐神を京都のいwashimizu男山(石清水八幡宮)へと勧請した際、おたびしよ御旅所とした草野の地に宇佐八幡三神を勧請し、社殿を建立、草野、行事、長音寺、大橋、宮市、こべの古辺野の 6 村のうぶすながみ産土神(生まれた土地や現在居住している土地の守護神)として祀ったことが始まりです。これが、現在の行事 7 丁目にある正八幡神社(正ノ宮)のことで、神田町の正八幡宮は、江戸時代のはじめに正八幡神社を分社したものになります。

1938 年 / 昭和 13 年

■ 正八幡宮の旧社殿

寛永年中(1624～44)に大橋、宮市、小部野の 3 村の産土神として、大橋村のあざじんでん字神田に正八幡神社より分社されました。かつての夏越祭では、ひきやま曳山やかきやま昇山などが巡行し、山車の周囲ではお囃子が練り歩き、大変賑っていたことが市の文化財に指定されている『国作手永大庄屋御用日記』にも記録されています。明治維新後は地域を代表する郷社として、広く崇敬されました。



▲旧社殿の様子を今に伝える貴重な古写真。現在の社殿が銅板葺きであるの
と異なり、瓦葺きであることが分かる。また拝殿の左右に現在はない回廊
が取りついていた。

2024 年 / 令和 6 年

■ 令和の正八幡宮

現在の社殿は、昭和 16 年(1941)に改築されたものです。市街地中心部に鎮座することもあり、冒頭に述べた祭礼以外でも、お宮参りや七五三のお参りなどで、一年を通して賑わいをみせています。特に、平成 11 年(1999)から始まった行橋～別府 100 キロウォークでは、多くのウォーカーが受付とあわせて完歩と道中の安全を祈願するため、正八幡宮へと参詣します。すっかり行橋の清秋の風物詩として定着しました。



▲右奥の大木はご神木のクスノキ。近年は 5 月頃よりアオバズクのつがい
が巣作りをし、産卵。7 月にヒナが巣立った後、南方へと旅立つ 8 月下旬
まで境内で過ごす。

令和の現在、初詣では福岡県特有の三社参り(太宰府天満宮・筥崎宮・宮地嶽神社)文化もありますが、ずっと昔は地元の産土神にお参りをし、日々の感謝をささげ、今年一年を健やかに過ごせるよう祈願するのが一般的でした。温故知新ではありませんが、古き良き慣習は大切に、将来へと繋いでいければと願っています。